

やまなし文学賞 青少年部門 佳作

レモン彗星

市村美咲希 作

今夜は空にレモンが一番近づきますよ。

僕はテレビから聞こえた言葉の違和感に顔を上げる。

「レモン^{すいせい}彗星、前回の観測は629年ごろ。これはなんとあの三蔵法師が天竺^{てんじく}を旅行した年で――」

三蔵法師が空を見上げるとそこにレモンが浮かんでいる。そんな光景を思い浮かべる。そういえば西遊記の三蔵法師はレモンに似たかぶりものをしていたっけな、などと想像を膨らませたところでアラームが鳴った。出勤の時間だ。

電車の車窓からは様々なものが見える。時にそれは人であったり自然であったり、運がいいと月が見えたりする。朝のぼんやりとした光に佇^{たたず}む月ほど柔らかな色をしたものはない。朝の月を見るたびに僕は、あ、パステルカラー、と思う。

「今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」と詠んだ歌人は平安時代の生まれだったか。朝の月を見て儂^{はかな}さとやるせなさを感じるのは千年前から変わらず刻まれたDNA。だとしたら、レモン彗星はどうだろうか。1396年前に同じように空を見上げた人は、レモンから何を感じ取ったのだろうか。そもそもレモンが日本に入ってきたのは明治時代のはずだ。鼻を掠^{かす}める人工的な香のかおりが忽^{たちま}ち消え、鮮やかな黄色に人々は目を白黒させたのだろう。レモン無き時代の人々はレモン彗星を見て何を思ったのか。爽やかな香りが鼻の奥に香った。

それにしても、朝の満員の電車はくさいというわけではないが、人の熱気と様々なにおいが混ざって、どことなく生ぬるい香りがする。今ここにレモンがあったのならどれほど良いだろうか。今レモン彗星が降ったならば、どれほど良いだろうか。真っ先に唐揚げを空に向けるサラリーマンの姿を想像し笑いかけたところで発車ベルが鳴った。慌てて電車を降りる。

レモン彗星。前回は飛鳥時代。飛ぶ鳥と空舞うレモン。レモンは漢字で書くとは何となく堅くて、でもひらがなだとどこか落ち着かない。カタカナがしつくりくるのはやはり外国から入ってきたからだろうか。Lemon と英語で書くとともにさらにレモンはレモンらしさを増す。頭がRではなくてLであるところがポイントだ。Lの発音の潔さは、レモンのすっきりとした酸味と相性がいい。そんな取り止めもないことを考えながら、レモン……レモン……と口ずさみ、今日も日は暮れる。

*

夕方、帰路についた僕は、近所の公園に足に向けた。普段であれば遠回りになるため使わない道だが、今日はどうしてもそこに行かなければ気が済まなかった。なぜならその公園にはレモン色の小さなすべり台があることを知っていたからだ。

公園が見えてくる。と、突然公園の入り口に丸い物体が落ちてきた。

近づくともそれは……

「レモン？」

単なる色と丈の詰まった紡錘形、まさしくそれは今朝僕が思い浮かべていたレモン、そして今この場所に僕の足を向かわせたレモンそのものだった。でも、今このレモン、上から落ちてきた……よな……？ まさかそんなレモン彗星って本当にレモンが……!?

「大変大変！」

現実が受け入れられず、混乱して首を傾げていると、声と共に一人の少女が飛び出してくる。言葉の深刻さと裏腹に声色は明るい。

少女は大切そうにレモンを地面から拾い上げ、袖できゅきゅっと擦って汚れを落とそうとしている。その視線が少しずつ上がり、そして。

「あっ」

走ってきた彼女と目が合った。

「もしかして今、レモンが空から降ってきたって、思いました？」

凶星だった。にいつと悪戯でもするかのような悪い顔を浮かべた彼女は、次の瞬間には僕の手を取ってずんずん公園内へと歩き出していた。これが奇妙な夜の始まりだった。

*

この世界って思っているよりも食べ物の形に似た自然物が多いんです、とベンチに腰掛けた彼女は言った。人間ってやっぱり見た物ベースになりがちだから、とさらにそう付け加えて笑った。彼女の主張では、この世に存在する食べ物、特に菓子など自由に成形できるも

のは、自然物に由来する形をしていることが多いとのこと。だから逆説的には食べ物に似ている自然物が多い、という論理になるようだ。例に「マドレーヌ」を挙げられて、僕は唸らざるを得なかった。確かにあれは貝を模している……。宮城の有名な土産物である萩の月だって確かに月を模している……。次から次へと菓子を思い浮かべては、この世界が美味しく見えてくる。ちょうど今日は良い月だ。萩の月、食べたいなあ、なんて思っていると、彼女はさらにこう続けた。

「だから、見てる景色が美味しそうで仕方ないっていう時があつて……」

「分かる」

自然物から菓子を連想して、腹の虫がか細く鳴き声をあげようとしているのを抑え込み、彼女に僕も思わず相槌を打った。しまった、これでは完全に彼女のワールドに入り込んでしまっているのではないか。

家路についていたはずの僕は、レモンへの好奇心から遠回り、彼女に手を引かれてさらに遠回りをしている。十月下旬にしては暖かな夜。つつい僕も、赤の他人である彼女の話に興じる気分になってしまいくらいには良い夜だった。

「お兄さんもあの話、聞いたんでしょ？ 名前聞いてからもう私、お腹減って仕方なくて……」

レモン彗星のことか。確かに僕はこの公園にあるレモン色のすべり台を見るためにここに来たのだ。

「で、私今からレモン彗星を『やる』から見ててよ」

簡単に頷いてから、違和感に気がつく。この子今、レモン彗星を「やる」って言ったか……？ レモン彗星は自然の現象であるはず。それをやってみせるとはどのように……？

疑問でいっぱい僕をよそ目に、彼女は持っていたリュックから、真新しいレモンを一つ、取り出した。

懷から取り出したフルーツナイフでサクッと紡錘形を真つ二つに分けた彼女は、先ほど同様、にいつと悪い顔をした。

ガサゴソとリュックをこねくり回し、あったあったと嬉しげに引き出したのは、タッパーに入った唐揚げだった。どうやら手作りらしい。

腕まくりをした彼女は、先ほど切ったばかりのレモンをその唐揚げの上で勢いよく搾った。黄色の果実から迸る、爽やかな香り。

そして、我慢できないというように、彼女は唐揚げをぽんと口に放り込んだ。

「……！ うまーーーーー!!」

一口目からレモンをかける奇抜さに僕はまず驚き、さらに大袈裟すぎるのでは、と思うほどの声量で唐揚げを頬張る彼女を見て、そんなに美味しいのか……と堪えきれなくなる。そして僕も唐揚げに手を伸ばす。

「え？ だめですよ？ これ私のだから」

そんな僕の手を無情にも彼女は払いのけて、また一つ唐揚げを口に放り込んだ。ならば僕にも秘策がある……！

「これでどうだ！」

どどんと僕が得意げに取り出したのは、夕食用にとさっきスーパーで買った牡蠣フライ。揚げたてだ。

唐揚げで頬をいっぱいにした彼女は、怪訝な顔で僕の取り出したパックを眺めている。その表情が、少しずつ、変わり……目の色が、明確に変わった。

「牡蠣ーーーーーっ!!」

僕の手から奪われる牡蠣フライと引き換えに手渡される唐揚げ。牡蠣フライを代償に、まずは唐揚げにありつけそうだ。

唐揚げを頬張ると、爽やかなレモンの酸味の奥に、懐かしい味がした。母さんが作ってくれる、生姜とにんにくで下味をしっかりつけた唐揚げの味によく似ていた。少し物足りなさを感じるとしたら、醤油の塩味がないところだろうか？ でもそんなことが気にならないくらい、やっぱり唐揚げにレモンはピッタリだった。

横を見ると、少女は僕から奪い取った牡蠣フライを満面の笑みで頬張っている。

「はふいふらい、はひめてふあべた……おいひい……」

あつあつだからか、ハフハフと口を慌ただしくしながら、彼女はそう言った。解説した「牡蠣フライ、初めて食べた……おいしい」というその言葉に少し引っ掛かりを覚える。

「え？ 牡蠣フライ初めてなの？」

こんなにも美味しいのに……！ 食べたことなかったなんて、珍しい……。そう思い、ふと聞いてみただけだった質問に、彼女は少し動揺した様子を見せた。

「あっ、えーと、私のお家、ちょっと過保護で……牡蠣って確か食べると具合悪くなることあるんですよ？ それで心配されたから、食べさせてもらったこと、なかったのかも」どこか歯切れ悪く、そんな風に理由を説明してくれた。確かに、牡蠣で当たるとしんどいもんなあ……。心配するのわかる気がする、と納得する。

次から次へと唐揚げと牡蠣フライを食べ終えた僕らは、膨れた腹を撫でながら、空を見上げていた。

「レモン彗星、レモン食べながら見るの夢だったんです。あー美味しかったー！」

えっと、君全然空見てなかったよね？ 食中心ではなかったかね？ と言いたくなる無粋な口にはチャックをして、僕も空を見上げた。

「んー……。星、あんまり見えないですね」

涼しい風に身を任せていると隣から少し寂しそうな声が聞こえた。そうなのだ。この公園は星空を鑑賞するには明るすぎる都会の真ん中にある。

「最近 は地方とはいえ明るい場所が増えてるからね……山の方まで行けば綺麗に見えるかもしれないけど、そこまではしようと思わなかったなあ」

「確かに」

そんなやりとりを交わしつつ、僕らは空を見上げ続けた。レモン彗星は見当たらない。当然だ。どの方角に見えるのか、どんな姿をしているのか、僕は知らないからだ。ついに、レモン色の彗星は、僕には観測できなかった。

僕らの静かな天体観測は彼女のくしゃみをもって終わりを迎えた。ずっと鼻をすすりつつ、さっと立ち上がった彼女は、リュックから新しいレモンを取り出した。いったい幾つレモンを持っているのか……。

「レモン彗星がどれか分からないので、私がレモン彗星降らせちゃおうと思います」

また変なことが始まろうとしている。僕は思わず背筋を伸ばした。

「レモンをきっかけに集まった私たちの出会いを祝して……」

しゅっと軽やかな音を奏でて、僕の目の前で爽やかな香りが迸った。

「よっ……と！」

「え!? 何してるの!？」

「レモン彗星見えないから、私がレモン彗星を降らせてるんです！」

「いや、レモン搾ってるだけだよねそれ……!？」

「うーん、そうとも言いかもですね……でも」

彼女の目が星にも劣らないほどキラキラと光っている。

「でも……楽しいですよこれ！ いい香りだし！」

レモンを搾りながらあちこちを舞う彼女は、まるで天女のようなだった。彼女の目の輝きとレモンの迸りに月明かりが反射して、とても綺麗だった。

彼女はレモン色のすべり台に駆け上がると、そのてっぺんから僕めがけてレモン彗星を降らせる。

僕に降り注ぐ、鮮やかな光。はっと息を呑むほどに美しい光景に、僕は魅せられた。次の瞬間、レモン彗星もといレモン汁が僕の目を襲う。

「いった……!？」

「あ、目に入っちゃいました？ あはは……ごめんなさい！」

目は開けられないが、すぐ近くに戻ってきたらしい彼女がハンカチらしきものを差し出してくれる。滲み出てくる涙を遠慮なく拭かせてもらう。すると、軽やかな笑い声が横から聞こえてくる。

「ね、レモン彗星、だったでしょ」

レモンが目染みて、表情は見えなかったけれど、その笑い声は「さっぱり」としか表現しようがないほど、今夜にぴったりだった。こんなにも「清々^{すがすが}しい」という言葉の似合う夜は後にも先にも今夜だけだとすら思った。

その夜僕は、彼女とレモンに乗って飛鳥時代に飛んでいく夢を見た。黄金の稲穂が風に揺れ、現代よりも大きく見える月の下で、僕らはレモン彗星になった。空から大きく手を振ると、飛鳥の人々も笑顔で手を振りかえしてくれた。目が覚めた時、鼻の奥にはまだレモンの香りが残っていた。

僕は昨日レモン彗星すいせいを見た。それからレモンに乗って飛鳥時代を旅した。次のレモン彗星の観測は西暦3421年の予定。僕は1396年後の今日の日付をカレンダーアプリから探し出す。

「3421年10月21日、地球にレモンが降る」

こんなに素敵すてきな予言があるだろうか。僕は来たる日をそつとカウントダウンにセットした。それは未来に向けた世界一素敵な、時限爆弾だった。

今を生きることと精いっぱい僕には千年という時はあまりにも長すぎて想像もつかないが、千年先もこうやってレモンを楽しむ夜があればいいと願わずにはいられなかった。

翌日のニュースに僕は驚愕きょうがくした。実はレモン彗星は「レモン天文台」という場所で今年初めに発見された彗星であることから「レモン」という名がついたのだそうだ。詰まるところ、爽やかな香りのあの黄色いレモンはレモン彗星とは関係なかったのだ。そもそもレモン彗星の色は、レモンイエローではなく、エメラルドグリーンだった。なんだ、色さえ違っているじゃないか。夜空を一生懸命探しても見つからないはずだ。レモン彗星なのだから黄色の彗星に違いないと僕は勝手に断定してしまっていたのだ。自然物たるレモン彗星は、これまた自然物であるレモンとは似て非なるものだった。

でも、実際にあの公園にはレモン彗星が降った。彼女が降らせた。それは彼女と僕しか知らないことだが、事実は事実だ。そうだ、今朝はレモン彗星の降った場所に水をやりに行こう。そして、これからできる限り毎日続けよう。あの公園には確かにレモン彗星が降ったのだということを、決して忘れないように。ふと鏡を見ると、あの公園で彼女が見せた、悪戯いたづらっぽい顔になっていた。やっぱり、昨日はつくづく、いい夜だった。

*

人がいなくなった公園。レモンを抱きしめた私は、ほっと胸を撫なで下ろした。

「はー……危なかった……!」

まさかご先祖さまと鉢合はちあうなんてね。先に本物のレモンを手に入れておいて助かった、と月に向かって手を合わせた。

私は1396年後の世界からやってきた。レモン型超小型時空超越機「Lemon - 12」に乗って。千年後も昔とあんまり変わらず、機械に「Lemon」なんて、自然物由来の名前を付けている。ただし、この時代と私の時代とは大きな違いがある。その違いは私がこうして千年以上前に来ている目的につながる。

私がやってきた目的は、西暦3421年にはもう存在していない自然物を、再び取り戻すためだ。度重なる環境破壊と、地球という天体自体の温暖化というダブルパンチは、私たちを苦しめ続けている。その中で、自然物や私たちの食生活にも変化が起こりつつある。例えば醤油しょうゆの味なんかは忘れて久しい。我が家伝来の唐揚げレシピには、下味の段階でにんにく、生姜しょうがを醤油で溶いて漬け込む工程があった。しかし、多くの栄養素を含む大豆は希少品で、狂ったように追い求める人の波の中で、急速に市場から姿を消し、次第にその味を人々は忘れていった。その中で、醤油の美味おいしさを知る人々の中の数名は、なんとか再びあの味を取り戻せないか、と試みるようになった。単純に考えれば、こっそり昔にやってきて、こっそり自然物を頂いて未来へ戻り、流通させればいいのだが、それでは済まないほど環境破壊のペースは酷ひどかった。そこで、国の偉い人たちはこんな方法を思いついた。「過去に行って、絶滅した植物の種を蒔まき、未来に向けた絶対数を増やしておく」。言うのは簡単だけれど、時空を歪ゆがめた結果、未来がどう変わってしまうかわからないという「時空超越倫理」に反するとして、すぐに却下された。ただ、秘密裏に実験自体は進められた。その実験を担当するのが私の一家であった。これまで、小麦と米の奪還に成功し、同時に特に未来が大きく傾いてしまう、なんて問題は起こらずに済んだ。不思議なのは、過去での生産作業に成功して未来に戻ると、人々は「絶滅なんて元からしていない」という目でその植物を扱っていることだ。こうして私たち一家のおかげで、密ひそかに未来は良くなっている。

そして今日、私はようやく本物のレモンを手にすることができたのだった。Lemon - 12はレモンを模しているのだが、レモンに関する残された資料をもとに作られたLemon - 12と本物のレモンとはやはり全くの別物だった。

2025年に到着し、着陸した木の上で、手に入れた本物のレモンとLemon - 12とを月明かりで比べているうちに、超越機の方を落としてしまった時は流石さすがに焦った。壊れなくて本当に良かった。未来に帰れなくなるところだった。

その上、絶対にバレてはいけない機密プロジェクトが、まさか自分のご先祖さまにバレそ

うになるなんて、思いもなくて尚^{なお}のこと焦^こってしまった。父そっくりの顔が目の前にあった時はさすがに驚いた。ただ、2025年には時空を超えることはまだ想像の域で、実現してはいないから大丈夫なはず、と自分に言い聞かせる。しかもこれで、レモンの未来は安泰のはず。そう胸を撫^なで下ろし、先ほど「レモン彗星^{すいせい}を降らせる」と言^いってレモンの種を蒔いた公園に手を振る。

「じゃあまた1396年後に」

レモン型超小型時空超越機 Lemon-12に乗り込みながら、次の作戦を考える。さつき食べた牡蠣^{かき}フライは、美味^{おい}しすぎた。綺麗^{きれい}な海が失われた私の時代では、魚介はかなりの希少品だ。牡蠣が育つように海を美化するにはどれほど時間がかかるだろうか……どれほど前に遡^{さかのぼ}れば良いのだろうか……。考えるだけで頭が痛い。でも、何年かかったとしても頑張りたいと思えるほどに牡蠣は美味しかった。

超越機のエンジンを入れる。ぶうん、と重たい音が体に響く。グツとアクセルに力を込めたら一瞬で未来だ。鈍い着地音と共に、私は未来に帰ってくる。

未来に帰って扉を開ける瞬間が、いつも怖いけど、同時に楽しみでもある。自分の少しの行動で未来が変わってしまう恐ろしさと、変わったことによつて得られる幸^{てんびん}せを天秤にかける瞬間だからだ。

今日も二重のドキドキを抱えて超越機のドアを開ける。と、その瞬間、ドアの隙間から流れ込んできた、爽やかな香り。

驚いて目を開けると、私はレモンの木に囲まれていた。ここまでハッキリと変化が出たのは初めてかもしれない。やつてくれたね、ご先祖さま。1396年前の今日に思いを馳^はせつつ、唐揚げを作るべく私は台所に走った。

空にはエメラルドグリーンの箒星^{ほうきぼし}、レモン彗星の尾が一筋、長く美しくのびていた。